

くすりばこ



薬剤部
とう まゆみ
勝 真由美



93. 塗り薬について

記録的猛暑に襲われた平成最後の夏もあっという間に終わり、風からは秋らしさを感じる季節になってきました。秋から冬につれて乾燥が気になってくるという方もいらっしゃるのではないのでしょうか？夏に日焼けした肌をいたわるためにも、これからの季節、保湿が大事になってきます。

ところで皆さん塗り薬にはいくつか種類がありますが、その違いをご存じですか？今回はその疑問を解決すべく種類と特徴についてお話したいと思います。

塗り薬は効果のもととなる主成分(主薬)と塗り薬にするためのベースとなる成分(基剤)、腐敗しないように加える防腐剤などの添加物が混ぜ合わさってできています。このベースとなる成分(基剤)の違いにより、使用感、皮膚への刺激性、主成分(主薬)の浸透のしやすさが異なります。そこでよく見かける、軟膏、クリーム、ローションの違いと特徴について説明いたします。

●軟膏

低刺激であり傷やじゅくじゅくしたところにも塗ることができます。一方で、クリームに比べ皮膚への主薬の浸透のしやすさが低い傾向があります。軟膏には油脂性基剤または水溶性基剤が使われています。油脂性とは油に溶ける性質のこと、水溶性とは水に溶ける性質のことです。多くの軟膏には油脂性基剤が使われています。それではこの2つについて詳しく見ていきましょう。

油脂性基剤の代表的なものにワセリン、プラスチックベース、パラフィンがあります。皮膚保護作用や、柔軟作用に優れているが、べつつきやテカリが残るため使用感が悪く、水で洗い流しづらいことが欠点になります。

水溶性基剤の代表的なものにマクロゴールがあります。こちらは水分を吸着する効果があるため、特にじゅくじゅくした部分に適しています。こちらは水で洗い流すことができます。

●クリーム

伸びがよく、主薬の浸透のしやすさが高いのが特徴です。一方で、軟膏に比べると保湿性が低い傾向があります。また刺激性があるため、傷やじゅくじゅくした部分には適していません。クリームは水と油が混ざり合った基剤が使用されています。水と油がきれいに混ざり合った状態のことを乳化と呼び、身近な例としては、牛乳やマヨネーズがあります。水と油の割合で、2つの種類に分けられます。

水の割合が多いタイプはバニシングクリームともいい、水分が多いことからさらりとした使用感で、水で容易に洗い流せます。

油の割合が多いタイプはコールドクリームともいい、若干油っぽく光沢感がありますが、刺激性はバニシングクリームより少ないとされています。

●ローション

水やアルコールを基剤としているため使用感がよく、即効性に優れています。一方で、効果の持続時間が短く、また傷やじゅくじゅくした部分には刺激となりますので適していません。

以上、塗り薬のお話でした。それぞれの違いを知ることで、皆様が目的に合った塗り薬を選ぶ際の参考に少しでもなれたらうれしく思います。